

2010.9.6

スマートシティ 40兆ドルの都市創造産業

万年“貿易赤字国”からの脱出へ
観光開国 につぼん

営業力強化の研究 大塚商会
成績下位30%を鍛え直す



サスキア・サッセン 米コロンビア大学教授(社会学) 聞く 本当の都市は、企業化せずに生き続ける

都市の「生と死」を分けるものとは何か——。政治、経済、社会、グローバル化の視点から都市社会学に取り組み続けてきた世界的権威で『グローバル・シティ』の著者に、新しい都市が備えるべき条件を聞いた。

東京、ニューヨーク、ロンドンといったグローバルシティを注意深く観察していると、生き物の魂のようなものが息づいていることに気づく。私はそれを「シティネス」と名づけた。今後建設される数多くの新都市がグローバルシティとして発展していくためには、この要素が欠かせない。

例えばニューヨークでは、過去30年ぐらいで多くの大企業がマンハッタンから逃げ出していった。オフィス維持コストの高さに耐えきれなくなったからだ。ところが、代わりに米国内外から新たな成長企業が流れ込んできて、空いたスペースはまた埋められていく。東京やロンドンでも同じことが起こり、都市の表情を大きく変えてきた。

失いながら生み出す力を持つのが都市

グローバルシティに共通しているのは、何かを失い続けているのと同時に、新しい何かを受け入れ続けていることにある。貧困や犯罪といった裏の現実も併せ持つ。

ありとあらゆるものが揃っているが、不完全であり、無駄や矛盾、危険も多い。そうした巨大さと乱雑さと偶然の力によって都市の活力と「ナレッジキャピタル(知的資本)」と呼ぶべき価値が生み出されてくる。それがシティネス。

最新の技術と莫大な資本を投入すれば機能的なスマートシティを建設できる。だが、そこにシティネスを吹き込むことは難しい。シティネスは、都市の歴史と、中央集権的に管理することができない複雑性の中から生まれてくるもので、技術やビルや資本だけでは材料不足なのである。

もちろん、スマートシティには都市として未知の可能性がある。スマートシティの中には、グローバルシティの複雑性を人工的に作り出すか急速に進化させることによ



サスキア・サッセン(Saskia Sassen)氏

1949年、オランダ生まれ。フランス、イタリア、アルゼンチンの大学で哲学や政治学を学んだ後、米インディアナ州ノートルダム大学で社会学・経済学の修士・博士号を取得。「都市社会学」の先駆者で、91年に著した『グローバル・シティ』(筑摩書房)は約20言語に翻訳されて注目を集めた。

て、即席のシティネスを備える所が出現するかもしれない。

あるいは、既存のグローバルシティの概念を超えた全く新しい価値が芽生えてくるのかもしれない。その点については今後の検証を待たなければならない。

中国やインドでは、これから何百、何千という数の新都市を建設する必要に迫られる。大半は膨張する新中間層に生活と仕事の場を与えるのが第一の目的であって、標準化、定形化、低コスト化されたものになるだろう。完全装備のスマートシティは建設・維持コストが高いので、何力所かでの実験的な試みにとどまるが、そこで実証された機能の多くがほかの新興都市にも導入されていくはずだ。

グローバルシティを観察していて気づくのは、「企業は死んでも都市は死なない」という事実だ。一方のスマートシティはそれ自体が企業であるかのように私の目には映る。企業化したスマートシティの死という可能性も、頭の片隅に入れておくべきではないだろうか。(談)

ある。人類がこの地球でこれからも生き続けられるように、クリーン電力の技術開発を競い合う、環境に負荷をかけない都市作りを競い合う、持続可能な21世紀型のライフスタイルや価値観を競い合う。

安易に目標を引き下げてはいけない。規制はどんどん厳しくしよう。そ

れを乗り越えるための競争を世界中に巻き起こそう。

日本の高度な技術が今こそ必要だ。韓国やアラブ首長国連邦(UAE)のマスタードールでの新都市建設実験に注目しよう。中国やインドといった新興国だけでなく、米国や日本、欧州ももちろん競争の舞台になる。

この競争の勝者は誰なのか——。それは、この地球にこれからも永く住み続けることができる我々の子孫なのである。(談) ■

日経ビジネス
ONLINE

関連記事「未来都市宣言」を9月6日から連載開始。